第四十二回「全日本中学生水の作文コンクール」岐阜県優秀作文集

水について考える

主催　水循環政策本部、国土交通省、岐阜県
後援　文部科学省、厚生労働省、農林水産省、
経済産業省、環境省、
独立行政法人水資源機構、
水の週間実行委員会、全日本中学校長会

「全日本中学生水の作文コンクール」について

「全日本中学生水の作文コンクール」は、次代を担う中学生の皆さんに、暮らしの中で体験している水にまつわる話や、祖父母、両親、先生から学び聞いた話などをもとに、「水」や「今後の水の使い方」について、考えていただこうという趣旨で、水の日・水の週間の行事の一環として実施しています。

今年は、第四十二回を迎え、岐阜県表彰として最優秀賞一作品、優秀賞二作品を選定しました。

この三作品について、このたび優秀作文集としてとりまとめました。いずれも中学生の皆さんの真剣な思いが伝わってくる作品です。ぜひ御一読ください。

「第四十二回全日本中学生水の作文コンクール」

一．応募要領

①テーマ　「水について考える」（題名は自由）

②対　象　中学生（中学生と同じ学齢の者を含む。）

③原　稿　四百字詰め原稿用紙四枚以内で日本語により表記されたもの

④あて先　岐阜県都市建築部水資源課（岐阜県内の応募者）

⑤募集締切日　令和二年七月七日（到着分有効）

⑥版権等
- 応募作品は個人作品に限る。
- 応募作品の版権は国土交通省及び岐阜県に帰属する。
- 応募作品は返却しない。

二．応募状況　応募学校数　六校　応募総数　一一三作品（一年…二作品、二年…四七作品、三年…六四作品）

三．審　査　応募作品を岐阜県で審査（地方審査）し、五作品を中央審査対象作文として国土交通省に推薦。中央審査において入選以上の者を除き、岐阜県表彰受賞者を選定しました。

目　次

国表彰（中央審査）

【入選】

『後世につなぎたい宝物』　高山市立荘川中学校　一年　田口　亜美（たぐち　あみ）

岐阜県表彰（地方審査）

【最優秀賞】

『私のなかのおいしい記憶』　滝中学校　三年　小川　裕宇那（おがわ　ゆうな）

【優秀賞】

『小さな事を世界のために』　多治見西高等学校附属中学校　二年　竹原　実優（たけはら　みゆ）

『日本はスゴい！』　多治見西高等学校附属中学校　二年　廣田　倖帆（ひろた　ゆきほ）

国表彰入選

『後世につなぎたい宝物』

高山市立荘川中学校　一年　田口　亜美

高い橋から見下ろすと、透き通る川の中に鮎やイワナ、ニジマス、ヤマメなどが泳いでいる。私の住んでいる高山市荘川町の宝物である庄川の風景です。これらの魚が泳いでいるということはその川がきれいな水であるという証明になります。さらに、河川環境によって味が異なるといわれている鮎の味を比べる「清流めぐり利き鮎会」というコンテストでは、二年連続で準グランプリをとっています。つまり、庄川の水はきれいで質がいいということになります。また、荘川町には特産品として、そばがあります。庄川のきれいな天然水を使って作られたそばはとても有名でとてもおいしいです。私は小学生の時、地域の講師の方に学校に来ていただき、実際に庄川の水を使ってそば粉をこねるというそば打ち体験をしました。そのときに「荘川町のそばってなんておいしいのだろう。」と感動しました。またそのときに使ったそば粉は私たちが種から育てたものを使いました。そばがすくすくと育つのにも庄川のきれいな水がたくさん使われました。荘川町のそばがおいしいのは、庄川の水のおかげだとそのとき実感しました。私にとって荘川町のきれいな川は宝物であり、これが無くなることは考えられません。しかし、この光景が当たり前ではないことに最近気が付きました。それは、家族で西濃へ行った時のことです。町の中を歩いているときにふと川を見ると、水がよどんでいてとても汚れているのを見かけました。その光景に私は衝撃を受けました。そして、私の町の庄川の美しさを守っていきたいと強く思いました。

しかし、ある時荘川町にごみ処理の最終処分場ができるかもしれないということを聞きました。その話を聞いた時にはあまり気にしていませんでしたが、じっくり考えるとごみ処理の最終処分場ができるということは、川の水が使われ汚れていくのではないか、そのためにきれいな水にしか住めない鮎などの魚はすむ場所を失い、いなくなってしまうのではないか、また、そばなどの農作物にも影響があり、育たなくなってしまうのではないか、私たちもきれいな水が飲めなくなってしまうのではないかという不安におそわれ、私は少し怖くなってしまいました。

そこで私はこの美しい庄川を残すために自分にできる身近なことがないか考えてみました。そこで二つのことを考えました。

一つ目は、荘川町の自然を大切にし守ることです。荘川町の九十四パーセントは、森林であり、私たちはその自然に囲まれて生活しています。森林は、水をきれいにし、私たちの住む世界の空気を浄化する役割をしています。荘川町では、毎年五月十六日にごみ拾いをかねて、地区の清そうが行われています。今年は、コロナウィルスの関係でごみ拾いはありませんでした。ですが、個人的にごみ拾いを行いました。飲み残しのかんや、ペットボトル、食べ残しが入ったビニール袋など多くのごみが捨ててありました。ごみによって土じょうが汚染され、荘川町の景観もそこなわれます。ちょっとしたことかもしれませんがごみ拾いを行い、自分自身もポイ捨てをしないことは自然を守り、きれいな水を守ることにつながると思います。

二つ目は、水に関心をもつことです。毎日登下校のときに、庄川の水の汚れや生き物の変化、ゴミが落ちていないかなどを見ていきたいと思います。また、季節ごとに変わる景気の美しさや大雨のあとの川の姿の変化を感じ取りたいと思います。その他にも、水に関するニュースを見て、水についての関心をもてるようにしたいと思います。

このきれいな庄川を守るために、自分にできる、自然を大切にすることや水に関心をもち続けることで、荘川町の宝でもあるきれいな水を後世につなぎたいです。

岐阜県表彰最優秀賞

『私のなかのおいしい記憶』

滝中学校　三年　小川　裕宇那

「おいしい。」と思った記憶は沢山ある。食べる事が好きな私は、これまでに色々なものを食べさせてもらった。叔母の結婚式で食べた高級フレンチや、ちょっとびっくりするような伝統食など。けれど、私にとって忘れられない、特別なおいしさを感じたのは水だ。よく、「山の空気がおいしい」とか言うけれども、私は「山の水がおいしい。」と思った。

中学二年生の夏、自然体験学習で、長野・群馬の県境にある、志賀高原へ行った。志賀高原に連なる山々、ユネスコエコパークに登録されている一帯をめぐる、6時間のハイキング。そのしめくくりに、山から湧き出す水を丸めた手に汲んで、口に入れた。

ヒダサンショウウオのいる湿原
青く緑色に光るコケ
岩の裂け目から出てくる湿った冷気
山の銅が流れてできた、特別に青い湖

これまでに自分の足でめぐり、見てきた自然の豊かさを作り出す水だった。普段、蛇口から水を飲んでいる私にとって、水の雰囲気が違う、そう感じた。「ここの、山に一番近いきれいな水は、ビールの原料に使われます。長野のビールは生産量が多く、おいしい事で有名です。」とガイドの方が言っていた。

日常へ戻って蛇口をひねると、あの水の事を思い出した。遠く、遠くから、やってくるんだなぁ。色々な人の手が加わって・・・

小学生の頃、社会科見学で、浄水場に行った事がある。水の汚泥を何回も沈殿して、砂利で濾過する。私が入るくらいの大きなタンクの前で、説明して下さった職員の方は、メダカで水質検査をしている事や、川の水が貯水池に運ばれてくる事を教えて下さった。

貯水池に流れてくる川の水は、どのような所を通ってやってくるのだろう。山から湧き出た水のあとを追いたくなった。

電車でゴトゴトゆられて岐阜から富山へ。太平洋から日本海へ、飛騨山脈と川に並行して、今年の春、水をめぐる旅に出た。下呂の温泉街、高山駅までの高山盆地。水田が広がり、V字谷も教科書で見た通りに存在していた。分水嶺といわれる辺りでは、見事に川の流れが分かれていて、髪の生え際みたいだった。そして川は神通川の上流になった。富山県に入り、猪谷駅からは、ローカル線に乗り換えて富山平野を突き進む。公害を起こした事のある神通川に流れる水は、青く、きれいで美しかった。秋になれば、きれいな水をうけとった稲穂が実り、稲作地帯、富山の米の一粒になる。水は米や蛇口を介して、私の生命のもとになっているのだと感じた。

富山市内を散策し、帰りの列車に乗っていると、日はだんだん陰り、辺りが暗くなった。その暗闇を見つめていると、長良川の鵜飼の光景が浮かんできた。篝火のオレンジ色の灯のたける鵜舟に、鵜匠が何羽もの鵜をあやつる姿は、岐阜の夏の風物詩だ。鵜がとる鮎には、鵜の口ばしのあとが残っていて、高級品として扱われる。そんな鮎は、川で生まれた後、海に下り、夏、産卵のために上流へ向かう。水をめぐる川の流れには、人の営みのみならず、自然の鼓動も感じさせてくれる。

小さい頃、牛乳が、牛や沢山の人によって自分のもとにやってくる事を描いた絵本を読み、「すごいな」と驚いた事を思い出した。

水も同じように、色々な所をめぐって今日の私のもとにやってくる。牛乳をつくる牛も水を飲んでいる。水を見つめる事は、私達の生命を見つめる事といえるだろう。自然体験学習で飲んだ、志賀高原の水は、水の美しさや、循環の輪を見せてくれた気がして、私の心のおいしい記憶として残っている。日々食べる食物にも、そんな水が流れている。毎日の食べる事が、より一層好きになった。そして、食物に関わる全てに感謝したくなった。

だから今日も、私は心をこめて「いただきます」という。――水の鼓動を感じながら。

岐阜県表彰優秀賞

『小さな事を世界のために』

多治見西高等学校附属中学校　二年　竹原　実優

「安全な水とトイレを世界中に」

これはＳＤＧｓで定められた十七の目標の中の一つだ。ＳＤＧｓとは「Ｓｕｓｔａｉｎａｂｌｅ　Ｄｅｖｅｌｏｐｍｅｎｔ　Ｇｏａｌｓ」の略称であり、持続可能な開発目標という意味を持つ。二〇一五年の国連サミットで決定されたもので、国連加盟国が二〇一六年から二〇三〇年の十五年間で達成するために掲げた目標だ。

私は学校でＳＤＧｓについて講話があったときに、よりよい世界を目指すための目標が定められていることを初めて知った。そしてその目標を説明されたときに、一番気になったものが「安全な水とトイレを世界中に」という目標だ。なぜなら、私たちが朝起きて顔を洗うときも、料理を作るときも、お風呂に入るときも、蛇口をひねればきれいな水が出てくるのが当たり前だからだ。でも世界に目を向けると、それは当たり前のことではないと分かった。講話では私よりも年下の子供たちが水をくむために大きなタンクを背負って歩く写真を見せられ、水をくみに行くために学校にも行けないことを知った。さらにその水は透明ではなく、茶色く汚れた水だと分かって驚いたし、もし自分がそれを使うことになったら嫌だなと思ってしまった。でもその子供たちや、その国に住んでいる人たちにとってはその水は大切な資源で、生活するためには使うしかないのだと思うと、嫌だなと思ってしまうことは失礼なのではないかとも感じて複雑な気持ちになった。

二〇一七年の時点で、二十二億人もの人々が安全な水を利用できず、そのうち一億四千四百万人は池や河川、用水路などの水をそのまま使っている。また、衛生的に処理できるトイレが家にない人は四十二億人もいる。このような状況の国がある中で、私たちのようにきれいな水を飲んだり使ったりできる国もあることに世界の不平等さを感じた。これらのことを知って、きれいな水が簡単に手に入れられる日本は当たり前ではなく、特別なのだと分かった。

今回ＳＤＧｓのことや水のことについて調べていた中で、私が住んでいる可児市にもＳＤＧｓの取り組みに参加している会社があった。その会社のスローガンは「可児から世界へ」ホームページには世界で使えるシャワー便座の取り付け工事をフィリピンで行ったということが掲載されていた。自分にはなかなかできることではないのでかっこいいなと思ったし、自分が住む地域に世界で活やくする会社があることが誇らしかった。

では、私たちにできることは何だろう。それはきれいで安全な水を使えることが、当たり前ではないということを忘れずに大切に使うこと。そのために、歯みがきをするときはコップに水をためて使う。シャワーの水は出したままにしない。お風呂の残りを洗濯に使う。私たちが水を節約しても、その分の水が世界の人に届くわけではない。ただ、小さなことから始められたらいいのではないかと思う。

安全な水を使えるということが世界中の誰にとっても当たり前になることを願い、自分ができることをもっと考えていきたい。

岐阜県表彰優秀賞

『日本はスゴい！』

多治見西高等学校附属中学校　二年　廣田　倖帆

水は人が生きていくためには必要不可欠です。水が飲めないということは生きていけないということです。私たちには水があるから今生きていけているということです。

私は前に香港へ行きました。香港のホテルには『水道の水は飲まないでください』と書いてあり、ペットボトルの水が置いてありました。香港では現地の人も観光客もみんなペットボトルの水を買うので、お店では売り切れていたり、とても高かったりして、なかなか簡単には手に入れられませんでした。とても高いだけでなく、お店によってお水の値段が違い、安く見積もって一香港ドルを十四円だとしても二百十円、高いところだと三百円以上する店もありました。日本では五百ミリリットルペットボトルの水ならば百五十円前後なのに香港は高くておどろきました。

では、なぜ香港では水道水をのんではいけないのでしょうか。それは水を浄化していないからだと考えられます。海外では水道水が飲める国はほぼありません。世界百九十三ヵ国のうち、飲める国は十五ヵ国のみです。ただ、その十五ヵ国でもまだ国民が安心しておらず、ミネラルウォーターを飲む国や、広い国土の一部のみ整備されているという国もあります。

では、なぜ水道水がのめない国が多いのでしょうか。それは水道の水を安全にして提供することを徹底して水道を整備するよりも、安全な水をペットボトル等の容器に入れて販売したほうがコストがかからないからだと言われています。そのため、香港のように水道はあっても水道の水が浄化レベルが低いため飲むことができないという理由もあります。また、アメリカ等の国土が広い国は水道水を浄化するのが大変なため、都市部のみ整備されているということもあります。

『地球は青かった。』

というユーリイ・ガガーリンの言葉にもあるように地球は約十四億立方キロメートルとされる水によって表面の七十パーセントがおおわれています。そのうち九十七・五パーセントは塩水で、人間が飲むことのできる淡水は残りの二・五パーセントしかありません。しかも、淡水のおよそ七十パーセントが氷河、氷山として固定されており、残りの三十パーセントのほとんどは土の中や地下深くに存在する地下水となっています。そのため、人間が利用しやすい河川などに存在する地表水は淡水のうち約〇・四パーセントしかなく、これは地球上の全ての水のわずか〇・〇一パーセントで、そのうち約十万立方キロメートルだけが持続的に利用可能な状態にあります。持続的に利用できるというのは雨などによってもたらされる水のことで、浄化しないととても汚く、飲めない水です。そのため、アフリカなどでは浄化する設備がなく、川に流れている汚れた茶色の水を飲み、その水のせいで病気がまんえんし、五歳まで生きられる子供がごく少数しかいません。

私はこれを知り、蛇口をひねればいつでもおいしいきれいな水が出てくる日本は恵まれていると分かりました。

水は有限です。そのため、いつかは無くなってしまうかもしれません。でも、水がないと生きていけません。だから私は大切にしていきたいです。これからは、日本の水道技術とおいしい水に感謝して限りある大切な資源『水』を未来へつないでいくためにも、ムダづかいをせず節水をこころがけていきたいです。日本のおいしい水に乾杯！！